

いきいき健康生活

鴻巣市広報「かがやき」 平成21年9月15日号 掲載

慢性副鼻腔炎（ちくのう症）

鼻の周囲の顔面骨には副鼻腔と呼ばれるたくさんの空洞があり、上顎洞、篩骨洞、前頭洞、蝶形骨洞に分けられます。それぞれの洞の奥の壁は脳や眼に隣接していると共に、鼻腔と交通しています。

洞内はとても小さな毛（せん毛）の生えた粘膜で被われ、分泌物などをせん毛の運動により鼻腔へ排泄しています。

慢性副鼻腔炎（ちくのう症）とは副鼻腔のいくつかが慢性的な粘膜の炎症を起こしている状態をいいます。一般にはかぜなどの急性炎症から始まり、インフルエンザウイルスやその他の細菌の感染を繰り返すことによって慢性化することが多く、また、アレルギー性鼻炎からの移行もみられます。

また体質や生活環境なども大きな影響を持っています。炎症が慢性化すると粘膜が厚くなって、鼻腔への出口を塞ぐことになり、洞内で分泌される粘液、膿（うみ）などが副鼻腔の中に溜ってきます。

慢性副鼻腔炎の症状は、鼻がつまる、臭いがしない、粘りけのある黄色い鼻汁が出る、鼻汁がのどの方に流れる、などが一般的ですが、頭が重い、集中力がないなどの症状を訴えることもあります。

さらに鼻腔や副鼻腔の炎症が中耳にまで波及して中耳炎を起こしたり、のどへ下がる鼻汁のために慢性咽喉頭炎、慢性気管支炎を起こすこともあります。

慢性副鼻腔炎の治療は、数回の外来治療で完全に治すことはなかなか難しく、治療期間はある程度長くなります。一般的な治療は鼻処置とネブライザーなどが行われます。